

我がふるさと『くにさき』

安松弘行（昭和41年 政治経済学部卒）



我がふるさとは「国東」…国の東と書いて「くにさき」と読む。

「国東」は大分県北部の瀬戸内海に突き出た半島で、六郷満山・仏の里と呼ばれている。

この地は養老二年、西暦718年に仁聞(にんもん)菩薩が開山したと伝承されている地域で、寺や神社が多く点在し、両子寺や文殊寺というように古来より密教文化の栄えた神仏習合の場所である。地元では四国巡礼と同様に、お寺に参る人達を迎え、食事や茶菓を振舞う習慣があり、「お接待」の“おもてなし”文化が色濃く残っている処でもある。

国東の目と鼻の先には愛媛県があり、目を左に転じれば、そこは山口県の下松、徳山…視線を更に左へ振ると源平の合戦跡の壇ノ浦が見える。それに大分県南部は、臼杵の磨崖仏でも良く知られている。

そして我が育てられし「ふるさと」は、国東半島の突端に位置する「国東市 国東町 富来浦」という場所である。風光明媚な温暖な土地柄で、瀬戸内海に面しており、半島の鼻先には七不思議の伝説のある姫島がぽっかりと浮かんでいる。

更に近くの大分空港は、実家より車で20分程の国東市安岐町にある。空港は私が結婚した年の【1971年】10月に開港した。当時、大分市内から空港への往復は、海路を行くホーバークラフトだった。

思い起こすと大学受験の折、私は鹿児島からの急行「高千穂」に(国鉄)杵築駅から乗車、関門海峡下にある海底トンネルを潜って関西を通り越し、延々と汽車に揺られて上京した。杵築から東京までは何と23時間…東京は遥か遠い都会だった。ふるさとから今では信じられないほどの時間が掛かかりました。

その頃の大学受験は、九州出身者は概ね関西の大阪止まりが普通の常識だった。しかし私は固い意志から、東京の大学受験を親に説得して許して貰った。

私は早稲田大学に挑戦する要望を学校側に出したが、当時の高校は、“合格成績

率を優先する風潮“だったため学校には認めて貰えず、確実に合格可能な法政、明治を受験することになったのである。

先ず、受験日の早い法政大学・法学部を受験した。結果は一発合格だった。「さあ、次は明治だ！」と気持ちを入れ替えて臨んだが、第一志望の明治大学の入試は二週間先の日程だった。

又、当時、法政大学では、合格発表後「一週間以内に入学金を納めなければ不合格にする」という決りがあった。その頃、他の殆どの私立大学でも同じ決りであった。「一週間以内に！」という理不尽なルールのため、已むを得ず「滑り止め」ということで法政に入学金を納めたのである。

しかしながら其の後、第一志望の明治大学・政経学部にも合格…両親には入学金に関して二重の金銭負担を掛けてしまった。九州から遠い東京の大学に送り出すだけでも大変な時期なのに、多額の財政負担を掛けてしまったことは私の苦い思い出となって、今でも脳裏に焼き付いて離れません。

さて、晴れて明治大学に入学し大学生活が慣れてくるに従って、周囲を見廻す余裕も生まれてきた。すると政経学部の我がクラスには、女子学生がナンと皆無なことが分かった。

ところが、和泉校舎の校門に入って直ぐの場所には、歌声喫茶的な解放された教室があった。昼休みになると、そこに文学部の女性もかなり集ってきた。私は女子学生目当てに参加して一緒に歌ったものだった。もしかして彼女達も「男子学生との出会いを期待して集ってきたのかも？」…しかし硬派の私には残念ながら恋愛は実らず、『甘い香りの素晴らしい出会い』は皆無であった。

大分から上京してどこに住んでいたのかと言うと、入学当時は世田谷区北烏山に一年間…そこで法政大学に通っていた高校のクラス仲間と、六畳一間の部屋に二人で下宿した。今で言う【ルームシェア】であった。

そして二年目からは法政の彼と分かれて、空室となった先輩の渋谷区初台に一人で移り住み明大前へ通学、そして卒業までは御茶ノ水へと通ったのである。空室となったのは、先輩が就職するためであった。

大学三年になるとゼミ入室試験があり、私は岩下篤弘教授の財政学ゼミナールに入った。そして四年生になると卒業論文が待っており、私は「社会保障問題」を取り上げて卒論を作成、そして提出した。当然の結果として、財政学の成績は「優」であった。そのような学生生活を送りながら、私は無事めでたく卒業した。



岩下篤弘教授と財政学ゼミナールの仲間たち

卒業した四年生の時のクラス担任は、近代経済学の池田一新名誉教授だった。池田先生は現在91歳で、田無駅の直ぐ近くにて健在です。現在は高齢なので、西東京市地域支部の行事に出席することは残念ながら困難となっています。

私が会社を辞めた60歳の時、政経6組のクラス会の発起人となって「還暦から卒業50周年まで」の12年間、全国クラス会を毎年開いて交流を図って来ました。先生にはその間のクラス会に毎回出席して頂きました。

しかしながらクラス仲間の高齢化と共に、平成28年の卒業50周年を機にやむなく解散、今後は気の合った連中と個々に交流することとしました。関東地区のクラス仲間は集りやすいので、今でも気の合った仲間同士10人位で花見や食事会をして交流を図っています。

「ふるさと」を離れて早や半世紀以上…我が人生履歴の書きたいことはまだまだいっぱいありますが、今後機会を見て続編を掲載したいと思います。(2017年 6月)